

長沖暁子さん

(慶應義塾大学経済学部准教授)

「技術」ではなく、子供の幸せこそ重要

非配偶者間人工授精（AID）とは、配偶者以外の第三者から提供された精子を用いて行なう人工授精だ。この方法を利用して子供を産む、あるいは生まれてきた人たちが抱える苦悩とは？ 当事者の方たちの声に長く触れてきた長沖さんに聞いた。

当事者の声が届いていない

— AIDで生まれ、その後、親となる方たちも増えています。著書『AIDで生まれるということ 精子提供で生まれた子どもたちの声』（寓書房）は、いろいろな意味で考えさせられました。この問題に取り組みれたきっかけを聞かせてください。

私の専門は生物学で発生学を研究していました。一方で、学生のころは優生保護法の問題がクローズアップされていて、女性の身体についても関心があり、そ

の問題にも取り組んでいたんです。体外受精が始まったのは一九七〇年代ですが、体外受精の技術を説明しつつ、それが女性にとってどういう意味を持つのかについての講演もしていました。そうした中で、体外受精は女性のための技術だと言われているけれども、本当にそうなのだろうかという疑問がわいてきたのです。一九九一年に『不妊』という本を翻訳した際には、「不妊治療で悩んでいる」という手紙が、本当にたくさん届きましたし、女性は子供を産むべきという圧力が高まっていると感じました。

一九九〇年代の終わりから、厚生省では生殖技術の

利用に関する方針を決めるべく生殖技術に関するガイドラインを作ろうと、委員会を作って議論を重ねています。当時、すでにAIDは当たり前で、卵子提供や代理出産を認めるかどうかが議論の中心でした。

ところがAIDの当事者の声は全然出てきていなかった。生まれた人はもちろん、精子提供を受けた人も、精子提供者も語っていない。ならば、まずは当事者の声を聞くべきだと、同じ考えを持つ女性研究者といっしょに、日本、そしてすでに多くの人が声を挙げていたオーストラリアで二〇〇三年からインタビューを始めたのです。冒頭の本は、主に三十代から四十代

の、AIDで生まれた方たち自身が自分の思いを書いています。大事なことであるにもかかわらず、これまで当事者である人たちの声がどこにもないというのは不自然だと思いましたから。

ただ、自分がAIDで生まれてきたと話すことは、親のプライバシーをさらすことになります。本の中でも、本名で語っている方は二人だけです。自分が語ることで親のプライバシーを暴露することになってしまうことに、本人たちがものすごく遠慮している。ここは、ほかの問題とはかなり違う難しさを感じる点です。

たとえば葉害を受けた方も声を挙げるのはとても勇気がいります。けれども告発する相手は明確です。ところがAIDで生まれた人たちは、みずからの出生にかかわる悩みや問題意識を誰に向かって発すればいいのかわからない。医師なのか、親なのか。それはすごく難しい。

AIDで出生したということについては、年若いいた親が倒れて初めて知ったり、遺伝的な病気が見つかって知ったりするケースがほとんどです。生まれてもの心がついたときに、きちんと告知されるのではなく、偶然に、親の病気がきっかけとなって知ること



●ながおき・さとこ 1954年生まれ。東京都立大学卒業。研究分野は科学社会史・科学技術史、ジェンダー、生態・環境。2003～05年「AID当事者の語りからみる配偶者・胚提供が性・生殖・家族観に及ぼす影響」の研究代表者として、AID当事者のインタビューを行なう。著書に『女性の視点から見た先端生殖技術』（東京女性財団）など。